

---

clear

瀬谷和泉

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

clear

### 【Nコード】

N1262BA

### 【作者名】

瀬谷和泉

### 【あらすじ】

お好み焼き店【なぎさ】の一人娘、汐織は高校三年生。【マルイチ】のおばちゃんに拾われてきた金髪男・上総と最近付き合い始めたのは内緒。海沿いにある小さな町の小さな商店街。ほのぼの、ゆるりと展開していく人と恋のお話。      このお話に出てくる施設・設定等はいくまで架空のものです

## 人物紹介

こちらはストーリーが進行するにつれ、増えていきます。

真田 汐織<sup>しおり</sup>……お好み焼き【なぎさ】の一人娘。高二。

柚木 上総<sup>かずさ</sup>……リカーショップ【酒のマルイチ】に居候中。金髪

ピアスの二十代前半

小嶋 凧<sup>なぎ</sup>……【なぎさ】のアルバイト。大学生。

真田 渚<sup>なぎさ</sup>……汐織の母親。お好み焼き【なぎさ】店主。38歳。

伴坂 南帆<sup>なほ</sup>……汐織の高校のクラスメイト。

<幼馴染みたち>

緑川 千夏<sup>ちか</sup>……精肉店【緑川ミート】の一人娘。高二。

<しおさい商店街の面々とその仲間>

河本 莉子<sup>りこ</sup>……通称“リコさん”。フラワーショップ【はなびし】

店主。独身。上総大好き。

佐々木 巖<sup>いわお</sup>……自動車整備工場を経営。【なぎさ】の常連客。

## 看板娘と金髪男 01

今日の客も近所の常連ばかりが顔を揃える。

【お好み焼・なぎさ】の店内が半分以上埋まるのは、決まって給料日と重なる五十日ごうびだった。それ以外は 言わないでおくことにする。

鉄板から立ち上る白い湯気、じゅうじゅうと音を立てながら焼けていく生地の音、店内に広がるソースの香り。そして、客たちの賑やかに飛び交う声。

店に立つのが幼少の頃から日常的だった真田汐織さなだ しおりにとって、狭い店内をめまぐるしく動き回りながらの接客は自宅の一室で宴会を開いているような感覚に近かった。

「汐織ちゃんよお、ビールもらうなー」

色褪せた青色作業服の胸元に、橙色で刺繍された【佐々木自動車整備工場】の文字。

自宅の冷蔵庫から取り出すように茶色の瓶を持ち上げて見せたのは、常連の中でも一番の古株・佐々木だった。

「はい！」

カウンターに並んだ一番左の伝票。【ビール】と書かれた欄に棒線を一本付け足した。来店してから一時間、あと二本線を足したら【正】の字が出来上がる。

苦笑いを浮かべた汐織は、隣に数枚並べられた伝票を確認した。チェック済みの品物はまだ半分ほどだ。

「<sup>なき</sup>風くーん、豚玉あがつてる？」  
「今持つてく」

目線ギリギリのカウンター越し。  
覗いた向こうには、肩まで捲り上げたＴシャツに腰に巻いたエプロン姿が様になる若い男がひとり。頭にタオルを括りつけたバイトの<sup>こじま</sup>小嶋<sup>なき</sup>風の額には、珠の汗が浮かんでいた。

小さな店とはいっても一ヶ月の内で数回訪れる繁盛期、しかも夜という時間帯のピークにひとりで厨房を任されるのがどれだけ大変か、汐織だって知っている。けれど店主不在の今、ふたりで厨房に入る余裕もないので任せるしかなく、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

はい、とカウンターのの上に差し出された器を受け取って、風を励ました。

「ありがと。忙しいのもう少しだと思うから、頑張つてね」

「渚さん帰ってきたらバイト代弾んでもらうから、気にしなくていい」

「お母さんてばいつまで遊んでるつもりなんだろうなあ、もう」

未だ帰宅する気配を見せない店主の母親は、最近少し羽根を伸ばし過ぎだ。

“味があつていい感じじゃない”と開店当初から定位置に飾られている、飛び散った油でイマイチ見えにくい時計の針を睨んで、汐織が注文の品を佐々木のテーブルに届けると隣のテーブルから追加の注文が入って来る。

「明太もんじゃと、海鮮お好みにキムチトッピングで。あ、あとビール二本とウーロン茶」

「はい。グラスは二つでいいよね」

グラスと飲み物を先に届けて、風を追加オーダーを入れる。

今日は日中三十度近い暑さだったせいで、飛ぶように売れていく瓶ビール。汐織の胸にも届かない背の低いガラス張り保冷庫の中も、そろそろ空になりそうだ。

ストックを確認する為に厨房に回って鉛色の扉を開けた汐織は、中を覗いて愕然とした。

「やだ……冷やすの忘れてた、どうしよう!」

がーん、なんてお決まりの効果音をぼそりと呟く。

頭を抱えて呆然としている暇があるなら、すぐに【マルイチ】に電話して冷えた瓶ビール配達してもらわなければ。

扉を閉めて表に回り電話の子機を手についた。ボタンは「短縮」と「3」のふたつを押せばすぐに繋がる。数字の上に汐織の指が乗せられた時、店の裏側でビンの擦れ合う音が聞こえた。

(ホントいつもタイミングいいんだから)

救いの神に頬を緩めて感謝しながら、汐織が厨房を抜けて素早く勝手口を開いた。

【酒のマルイチ】と書かれた軽トラの荷台に空きビンの差し込まれたケースを積み込む人の姿があった。暗がりでも分かるくらい金の髪頭が彼の目印だ。

「ねえ上総かみづみ、今から急いで冷えた瓶ビール二ケース、うっん、一ケースでいいから持ってきてくれない? お願い!」

「やだね。俺はこれで仕事上がりなんだよ」

「つまみご馳走するから協力してよ。今日お母さんいなくてめちゃくちゃ忙しいの！　お願いね、頼んだからね。お母さんの株上げるチャンスだよ」

返事は聞かず一方的に言い捨てて扉を閉めた。ビールが届けられるかどうかは八か九かの賭けみたいなものだけど、きっと届けてくれると汐織は信じている。ラストのひと言が上総を釣るには効果的なのを十分に心得ているからだ。

急いで店内に戻ると、カウンターに準備された器を風が客に配っているところだった。

「ごめん風くん、そんなことまでやらせて」

「いいつて、渚さんに口添えしてもらえれば。追加の話はついた？」

「うん、多分大丈夫」

そっか、と笑う風と汐織の和やかな雰囲気、割って入った佐々木の声が絶好調だった。

「やあーっぱり、二人並ぶと若夫婦みてえでいいなあ。風はいいダンナになるって渚ちゃんにはオレからも言ってやるから、心配すんなや」

豪語するほど酒が強い訳でもないのに浴びるようにビールばかりを口にする世話好きの中年。日焼けを重ねた黒い顔でもはつきり見て取れるくらい朱に染まって“飲み過ぎ警報”を発令中だった。

豪快な笑い声と勢いが止まらず、グローブのように分厚い手が風の細い腰を思い切り叩きつける。

「いてっ」

「これくれえで痛いだのと騒いでどうすんだ、男はここ鍛えてナン

ボだぞ！」

少々下ネタ混じりに説教しながらバシバシと、楽しそうに二・三度繰り返す。

男子の誕生を切望して精を出してはみたものの見事というか憐れというか、結局四姉妹の父親となった佐々木は風が偉くお気に入りだ。

酔いもいい感じで回ってくると、酒の肴みたいに彼を汐織の“ドンナ候補”として語り始める。

「オレ厨房戻るから、シオ、あとヨロシク」

絡み始めた佐々木に嫌な顔一つせず、風はタイミングを計って厨房へ駆け込んだ。腰を摩りつつ逃げる後ろ姿が汐織には可笑しかった。

「汐織ちゃんが高校卒業したら、結婚でもしてふたりで店継いだらいいや。祝儀はたっぷり用意してやるからよお」

「佐々木さん、飲み過ぎだよ」

「なあに言ってたんだ。まだまだあ」

この様子では閉店まで帰りそうもない。さて、どうしたものかと汐織が思案を巡らせた時だった。

「渚さんがいないとやりたい放題だな、おっさん」

店の入り口付近に大瓶の入ったビールケースを軽々と抱えた上総が、怪訝な表情をして立っていた。

商店街の飲食店はみな世話になっている【マルイチ】は、汐織の店から二軒隣りに店を構えている。

「無駄に店を忙しくしてんのは、セクハラ親父の絡みが原因かよ。唯一の駆け込み寺にそのうち出入り禁止喰らっても知らねーぞ」

佐々木に毒を吐きつつ店内を横切り、上総がガラスの庫内へと手際よく冷えた瓶ビールを詰め込んでいく。

「ありがと。絶対来てくれると思ってた」

「あんなこと言われたら来るしかねえだろ」

口元を歪めながら笑って見せる彼の元へ、千鳥足気味の佐々木がやって来た。

「……こんのクソガキ。相変わらずの減らず口に、派手なツラしやがって」

「そう僻むなよ。これも立派な商売道具なんだぜ。そっちの商売傾きかけたら、また営業に貸してやつから」

ゆつくりと立ち上り不敵な笑みを浮かべた背の高い上総に、少し虚ろな目をして咬みついた。

「だーれがおめえに貸しなんて作るか！ はっ！ あんな騒がしいのは二度とご免だわ！」

風とは対照的に、佐々木はこの彼を酷く嫌ってる。

「人が取って来た仕事こなせねーそっちの事情だろうが。責任擦りつけんな」

去年の秋頃だったろうか。

営業の仕事を軽視する物言いをした上総とそれに反発した佐々木が、同じようにこの【なぎさ】の店内で口論になった。

結果、金髪頭そのままでワイシャツにネクタイを締めた上総が営業に回って、目をつけた配送会社を次々当たっては点検・整備の仕事を山ほど持って帰って来た。のんびりまったり仕事を進める佐々木の会社一年分の仕事量を遥かに超えてしまい、ちょっとした騒ぎになった経緯がある。

「シオ。明太もんじゃと海鮮好みキムチトッピング、上がりね。あれ 賑やかだと思ったら、上総か」  
「来てくれたのは助かるんだけどね」

カウンター越しに器を受け取り、後方で未だ賑やかに嫌味の応酬を続けている二人を目で追って、汐織の口から自然とため息が漏れた。

「ほんとーに口の利き方がなってねえガキだな！」  
「おっさんこそこんなとこで油売ってねえで、さっさと家帰れよ。配達行く度に女五人に飯食ってけて連れ込まれるこっちの身にもなってみろ、次は風呂にでも連れ込まれんぞ俺」  
「な……なにいつ!!」

すっかり店内の客の見世物と化しているふたりの口論は、しばらく収まりそうにもない。

お母さん、お願いだから早く帰って来て。

汐織はもう一度、時計を睨みつけた。

常連客の佐々木と酒の追加配達にやってきた「マルイチ」店員・上総の口論に、それぞれ客たちの援軍がついて店内中が盛り上がった宴の後。

時刻は十時近くになっていた。

残されたのは店内のテーブル数卓と洗い場に、山のような皿とグラス。この惨状を一体全体どうしてくれるというのだろう。おまけに。

「佐々木さん起きて。おばさんにまた叱られるよ。おい、佐々木さん」

擦り切れた畳の目があちこちに広がる座敷に、大の字で横たわる作業着姿の酔い潰れた中年がひとり。汐織が耳元で呼びかけながらゆさゆさと身体を揺すってみるがびくもしない。低く唸る地響きみたいなびきが、より深く眠っている証拠だった。

口論がヒートアップするにつれて飲むこと飲むこと。上総が追加で持ち込んだケースの三分の一程にまで手をつける始末だ。

「どうしよう。今日は家に帰さないとまずいよね」

困ったと、汐織は額を押さえた。

顔を見て食事をするのも嫌なのだというほど、佐々木家では夫婦喧嘩が連日絶えなかったという。

こうして酔い潰れては朝まで寝過ごし、仕事へ向かうという日が

ここ三日ほど続いていた。佐々木の家にはその都度連絡しているが、「しばらく迷惑かけるけど」と申し訳なさそうに言うものの家族が迎えに来る気は全くないらしい。

（今月結構飲食代掛かってるけど、平気なのかな）

新たな夫婦喧嘩の火種にもなり兼ねない、余計な他人の財布事情まで汐織は心配せずにいられない。

「オレが家まで送ってくよ」

首を傾げたところを見られたのかもしれない。いや、見ずとも彼なら同じことを言っただけだ。厨房の中から姿を見せた風がここでもまた救いの手を差し伸べてくれるというのだから有り難い。

「送ってくつてどうするの？」

「背中に背負ってくしかないよね」

「ちよつと待つて。佐々木さんち大通りの向こうだよ！？」かなり距離あるし、風くん家と方向逆でしょう？　ここは然るべき人に責任持つて送ってもらえばいいと思う」

汐織が膝をついた座敷から背後を振り返った時だった。

テーブル席について枝豆をかじりながらテレビを見ていた“然るべき人”が、眉を寄せて緑色の殻を投げつけてきた。

「おっさんのイビキうるせえ。テレビが聞こえねえよ、ったく」

「ちよつと上総、投げつけて来ないでよ！」

畳の上にぼとりと落ちたそれを汐織が思い切り投げ返すと、手酌

でビールを注いでいた上総のグラスに奇跡的に入って思わず感嘆の声を上げる。

「……あ、すごい」

「なにがすごいだ、バカ。グラス替える」

不機嫌にグラスを突き出す態度に、精神的・肉体的疲労も重なっていた汐織はカチンときた。得意分野でない洗い物の仕事待ち受けていることも思えば、更にイライラも募る。

「グラスくらい自分で替えて。それより少しは反省したら？　こんなになるまで飲ませた責任として、佐々木さん家まで送るのは上総の仕事だからね」

「俺はおっさんに酒なんて一滴も勧めた覚えねえよ。イラついて勝手に煽ったのはおっさんだろうが。それに、風が送るって言ってるんだろ。人の厚意はありがたく受け取っておくもんだぜ、汐織」

「風くんは今日一日がつっり働いてくれたんだから、そこまで押しつけられないじゃない！」

びしつと汐織が言い切ると、不満一杯の表情で上総がグラスを取りに立ち上がった。

「こっちは“朝から”一日がつっり働いてんだけだな。出張までしてきてやったのに、ひでえ言い草」

ぼそりと放たれたひと言に鋭く胸を突かれて、汐織は返す言葉もない。

けれどここまで泥酔させた原因はやはり彼にあると思うし、と葛藤していると。

「もういいってシオ。上総も酒入ってるから車出せないし、背負っていったとして途中で放り投げられても困るだろ。代わりに洗い物くらい手伝わせて手打ちにしたらいいよ」

「確かに平気でその辺に放置しそうだけど……」

「そういうことだから、オレはこのまま先にあがるから」

「うん。今日は本当にありがとうね。お母さんにはよ……つく言っておくから」

とうとう今まで電話一本、メール一通寄越さない母親に苛立ちながら、風に感謝した。

「うん頼むよ。ほら佐々木さん家に帰るよ。おばさんに怒られても八つ当たりしないでよ」

「んが……おお風かあ」

「じゃ、お先」

よし、と小さく声を上げただけで簡単に背負いこんだ風のどこにそんなパワーが潜んでいるのか汐織は不思議で仕方ない。華奢な背中に乗せられた佐々木の姿はまるで襲いかかる熊みたいだ。

気をつけてねと店の扉を開いて見送って、視線を店内へ引き戻す。残されたのは、なんとなく気まずい心境の汐織と不機嫌さが消えない上総、そして洗われるのを心待ちにしている食器たち。

「……洗い物、手伝ってね」

「これが片付いたら考えとく」

再び手酌でビールを注ぐ上総の横を通り過ぎて汐織は厨房に入った。

「今日は渚さん、なにしてんの」

ふたりきりになった店内に、上総の声が響く。皿と同じように母親を名前で呼ぶのは初めて会った時から、ずっとだ。

「友だちと食事して映画観るとは聞いてるんだけど。積もる話が盛り上がってるんじゃないかな」

「ふうん。最近多いな」

「……やっぱりそう思う？」

「実は男が出来たんじゃねえの」

突拍子もないセリフに汐織の手が止まる。ゆっくりと店内の上総へ視線を巡らせるが、彼は相変わらずテレビの方に釘づけだった。

「まさか。お母さんてば未だに毎日お父さんの写真にキスするくらい未練タラタラなんだよ？ それはないんじゃないかな」

見てるこちらが恥ずかしくなるくらい大好きだの、愛してるだのと写真に向かって連呼してるような母親に、彼氏が出来たなど想像し難い。

もしも、万が一事実だとしても、隠すような恋愛をするタイプの人間ではない。過去の恋愛話を、未だに女子高生のようにきゃあきやあと花を咲かせて語る人なのだから。

ところどころを端折りながら上総に伝えた娘としての見解は、夢中になっているテレビから視線を奪うくらいには興味を引いたようだった。

「へえ、意外。普段すげえサバサバしてんのにな。渚さんて実はそんなキャラか」

「お酒入ると物凄く可愛い乙女になっちゃうし。　あ、これも内緒ね？」

「汐織の親父が、よっぱどいい男だったんだろっな」

「なんだろっね、きつと。私は全然記憶ないけど」

父親は汐織が三歳を迎える前に事故で亡くなっているの、残された家族写真を見ても記憶に面影が蘇ることはない。

「お母さんには苦労かけてるし、息抜きになるならって留守番引き受けるようになったけど。さすがにこっ夜遊びが続いて店の営業に支障が出てくると、注意してもいいよね」

「その判断はお前次第だろ。ま、言ったところであの人が素直に聞くとおもうねーけど。……っし、行け、決めろ！　っしやー！」

上総の力の籠った握り拳がテーブルを叩きつける。

同時に彼の視線の先から、高揚気味に実況するアナウンサーの声が聞こえた。今日はサッカー日本代表の試合があるのだと客が話していたから、おそらくそれを観ているのだろう。

「上総、最近行ってないの？　誘われたっていうクラブチームの練習」

「ん？　ああ。辞めた」

「そうなんだ辞めたんだ……て、えっ！　辞めたって、ホントに辞めちゃったの！？」

高校時代には全国大会にも出たことがあるという噂が届いたのか、この近辺では若手揃いで強豪と名高い社会人チームのオーナー自ら上総を勧誘しに来た日には、商店街のあちこちから【マルイチ】に祝いの品々が届けられるという賑わいをみせた。

毎週水曜は練習に参加するからとサービス残業の空き瓶回収をし

ないで帰っていたのだが、気付けばこの一か月ほどは連日顔を見ていたことに汐織は今さらながら気付いた。

まさか辞めていたなんて。

動揺した汐織の手を滑り落ちたグラスが一個砕け散った。

「またやったな。ガラス触んなよ」

言われるより先、反射的に伸ばしてしまった汐織の指先に、鋭い痛みが走る。

「あいたっ」

時間差でじんわりと真っ赤な血の滴が溢れ出てきたのを確認すると、彼女の口から自然とため息が漏れた。

「……ったく」

舌打ちしたのは上総だった。

厨房へやって来て血の滲んだ汐織の指を水道水で勢い良く洗った後、何のためらいもなく自らの口に含む。痛いくらい吸い上げられて肩を竦めた汐織が指を引こうとするも叶わない。

「そっちの方が痛いよ。大丈夫だから離して」  
「黙っとけ」

指を加えながら短く言って、くたびれたスニーカーが床に落ちたグラスをものぐさに掻き集めた。

汐織は昔からモノをよく割る・壊す。出来ることなら避けたかった洗い物だが、そんなことを言ってる場合ではなかった。この結果はある意味想定内、覚悟はしていた。

「生傷の絶えない女だな。見るこの指、傷だらけじゃねえか」

「好きで作ってるわけじゃないんだよ」

「んなこた知ってる。相性ワリいの分かってんなら少しは氣い張れつての」

「ね、ねえ。なんでサッカークラブ辞めたの？ 久し振りに楽しいって言ってたじゃない」

上総の口の中からようやく解放された指を慌てて引き寄せながら、話題を無理やり転換した。

右の中指に巻かれた絆創膏の下には、昨日作った切り傷が隠れている。左の指は先々週に包丁でざっくりいった傷もまた。

乙女の手元からは程遠い現実は眺めていると虚しさに襲われるので、気持ちを切り替えささと洗い物の続きに取りかかることにした。

そんな汐織を引き止めたのは、上総だった。

「人間関係が色々面倒だったの。おら、これ以上ガラスの後処理増やされても困るから手伝ってやる。その前に、先にすること済ませてからな」

低音で少し掠れ気味の彼の声は、ふとした時にどきりとするくらい色香を孕む。

背後から腰を抱かれて引き寄せられ、伸びてきた手に頬を包み込まれると、汐織は反射的にびくりと体を震わせた。

「ビビってんじゃねえよ」

「……だって」

「もうあんな無茶はしねえって言ったろ。信じる　　ってもムリか」  
「信じてないわけじゃないんだよ。ただ体が勝手に反応するから…」

…」

隙をついて重ねられる唇。

身体は正直だ。頭ではやり過ぎたつもりの“その時”を瞬時に蘇らせてしまう。

それなのに戸惑う気持ちを語っている最中にも関わらず、仕掛けた上総の図々しいことといったら。

「構える隙を与えなきゃいいってことだな」

「そついうことでもないと思う……んっ」

捉えた顎を斜め後方に引き上げた少し無理のある体勢で、もう一度。今度は先ほどよりも濃厚なキスをする。

身体は記憶を刻みつけるのにはとことん有効なのだと思う。  
引き寄せられた腕の力だけで腰が抜けそつになるのも、どんな風に乱されていくのか先の展開を経験してきた記憶のせいだ。

「毎日……しなくてもいいのに」

「なんだよ淋しいこと言いやがって。こっちは一日一回でも足りないってのに」

「お願いだから、そこは足りてください」

「健全な男子にするお願いじゃねえんだよ。無理だな」

そつして三度、唇を深く重ねる。

“ こんなキスを日に何度も交わしたら、どうにかなりそう ”

思惑の意味は微妙に違う二人が交わす口づけは、こうして人目を忍んではこっそりと繰り返されていた。

“あいつは戌年生まれでな、よくよく色んなモン拾って来んだ”

次々宝を掘り起こす昔話に出てくる犬のように例えられたのは、リカーショップ【酒のマルイチ】店長、丸山の妻・好恵<sup>よしえ</sup>。

道を歩けば先々でなにかと土産を得てくる奇妙な習性はまだ良い方で。彼女には拾い癖もあった。

実際、ゴミ集積所から家具やら電化製品やらを持ち帰る姿を商店街の人間のみならず、近辺の住人が何人も目撃している。それらはいずれも修理して自宅で使用していることから、時代に沿った【リサイクル活動】への貢献として周辺住民たちになんとか容認されている。

ところが、だ。

“マルイチのおばちゃんが、ついに若い男まで拾って来た”

一年ほど前しおさい商店街にそんな話が瞬く間に駆け巡った時には、商店街きつてのオシドリ夫婦にもいよいよ亀裂が生じるかなどと、まことしやかに囁かれた。

営業そっちのけで商店街の面々が出迎える中、汐織と母親の渚も最前列を陣取っていた。

『今日からウチで居候しながら働いて貰うことになった、<sup>ゆのき かずさ</sup>柚木上総くん。宜しくね』

好恵に連れられていたのは、真つ赤なナツプザックをひとつ肩に担いだだけの若い男。年の頃は二十代前半。金髪ピアスの長身の彼はおおよそ商店街のモノクロな雰囲気には似つかわしくなく、異彩を放っていた。

他人を拒絶する切れ味鋭い刃物のような眼差しが、汐織の中で今でも強烈に印象に残っている。

『じろじろ見てんじゃねえ』

第一声がそれで。口も態度も横暴そのものだった。

またずい分としつけの悪そうな狂犬を拾ってきたものだど、好恵に対して集まった一同の視線が冷たいモノに変わる直前。

『ひとりじゃ何も出来ないから、好恵さんに連れて来られたんじゃないの。いい年して自立も出来ない癖に強がつてんじゃないわよ。新参者らしく、頭のひとつも下げたらどう!』

平手を見舞いながら一喝したのは渚だった。

汐織は、反撃されたらひとたまりもないほどの体格差がある相手に容赦なく立ち向かった母親の身を案じた。が、頬を打たれた側の彼は魂でも抜かれてしまったように、呆然と立ち尽くしたままだった。

そして。

『……すみません。……ヨロシク、お願いします』

あつさりと白旗よろしく、ぼそぼそと呟きながら小さく頭を下げたのだった。

『渚さん。ありがとうございました』

その日以来、彼が尊敬の念を込めて慕っているのは誰が見ても明らかなのに。第一印象が最悪だったせいかな渚は上総に対していい顔をしたことがない。

愛想が売りの母親が毛嫌う男、というレッテルを貼られた彼に興味を抱いたのが汐織の恋のきっかけだった。

媚びる訳でもなく淡々と、けれど親しみを込めながら仕事を通して渚に接する上総の健気な部分を垣間見て、彼に抱いていた印象が徐々に変わっていった。

『それでも一応、立場的なものとか渚さんに嫌われてる不利な状況だとか、ない頭でそれなりに考えてみたけど。やっぱり俺、お前が好きでどうしようもねえんだわ。付きあわねえ？ 俺ら』

告白してきたのは彼の方だった。

『うん……私も上総のこと、好きだよ』

出逢って一年近く。

抱いた想いを伝えてふたりが付き合うことになったのは、先月の話。

上総を快く思わない渚の手前、秘密の交際が続いている。

「二人で遊びに行くくらい、別に隠さなくてもいいよね」

汐織がさくりと、朝食のシュガートーストにかぶりつく。

休日も不定期な一日中働きづめの社会人と高校生では、時間が

みあわないのは当然で。同級生のように放課後をデートで過ごすなんて出来ないのは、最初から分かっていたこと。けれど汐織はこの頃少しだけ、校内で見かけるカップルたちを羨ましく思うようになっていた。

「ダメ元でデートにでも誘ってみようかな」

誘うシチュエーションを考えただけで照れ臭い。

冷やかされるだろうか？ 喜んでくれたら嬉しい。

想うと自然と頬が緩む自分など上総はきつと知らない。お互い気持ちを伝えたはずなのにどこか距離を感じるのは、一緒に過ごした時間がまだまだ圧倒的に短いせいだと推察している。

「マルさん、半日でもいいからお休みくれるといいんだけどな」

マルさん、というのは【マルイチ】の店長・丸山の愛称だ。

突き刺したフォークにぱりつとした感触を伝えるワインナーを頬張りながら汐織がひっそりと決意したところへ、ボサボサ頭の母親が二階から姿を見せた。

「ああもうっ。たまに巻くと面倒なんだからあ」

「おはよ」

昨日の夕方に留守番を依頼されてから半日ぶりの再会。

渚の寝起きはよろしくない。結局何時に帰宅したのか分からない。昨晚も、シャワーも浴びず着替えただけ済ませて就寝したと思われる。アイメイクもそのまま、化粧の落ち切っていない顔に酷い寝癖。大きく巻かれたカールは四方八方に乱れ飛んでいた。

「んー、おはよ」

「またブスになつてゐるよお母さん。相当お酒飲んだでしょ」

払えども視界を邪魔する髪をついには、食卓に置いてあつた輪ゴ  
ムで簡易的に留めはじめた渚に指摘する。

すつきり覗いた顔の一部が少し腫れぼつたい。父親がベタ惚れだ  
つたという、可愛らしい大きな瞳の上の瞼がむくんでいた。

「だってえ、滅多に飲めないような高いお酒出してもらつたんだも  
のぉ」

（だってえ、じゃないってば）

間延びした口調が飛び出すのは、アルコールが抜け切つていない  
せい。汐織は脱力した。

三十代〜七十代まで揃つた商店街経営陣の中、その枠からも外れ  
るくらい若い部類に映る「アイドル」的な童顔。いつまでも若くあ  
るべき努力を重ねてくれるのは娘として非常にありがたいのだけど、  
アラフォーの実年齢に対しての自覚を少しは持つて欲しいと願う。

……特に精神的な部分で。

「お酒出してもらつたつて、映画観に行った後どこに行つたの？」

「ん〜目の保養？ それでいてチャホヤしてもらえて、美味しい  
お酒が飲めると・こ・ろ」

目の保養？ チャホヤ？ 美味しいお酒が飲める場所？

並べられた単語と緩んだ表情から、汐織の中で固まつたイメージ  
そのままに訊いてみた。

「……まさかとは思うけど、ホストクラブ　とか？」

「正解！ も〜ねえ楽しいの。それにす〜〜つごくカッコいい男の子がいるのお！ 今度汐織も一緒に行かない？」  
「未成年の娘をホストクラブに誘う親がどこにいるの。行かないよ」  
「も〜つまんないわねえ。汐織は性格がパパに似て真面目なんだからあ」

もーもー連呼する牛状態の母親との会話にため息が漏れた。若い時期は更に突き抜けていただろうと思うと、愛想も尽かさず付き合っ  
て結婚までした今は亡き父を尊敬する。

「カッコいいって言うけど、風くんくらいの歳の人でしょ？ お母さんいつからそんなに対象年齢下がったの、お父さん一筋じゃなかったの」

ダイニングテーブルから腕を伸ばせばすぐに届く、背後に置かれたチェスト上が定位置の写真を持ち出した汐織が印籠さながら翳して見せる。

途端に渚は恍惚とした表情になって、

「ああん。パパ、やっぱり素敵！！ 浮気じゃないから心配しないでね」

いつものように「ん〜〜〜っ」と熱いキッスをした。

写真を抱き締めながらつらつらと愛しい人への想いを語る渚を横目に、汐織は残りのトーストと牛乳を流し込んだ。食べ終えて流しへ運んだ食器を洗おうと手にしたスポンジを、元に戻す。また割つてしまいそんな気がしたので洗うのを止めた。

ふと、右手の指に貼られた真新しい絆創膏を眺める。

昨晚、口に含まれた時の感触やら上総の顔やら、しまいには厨房で交わしたキスまで蘇ってきて、体中が熱くなった。

「きよ、今日は約束あるんだ。なるべく早く帰るけど、お店は手伝えないからね」

絆創膏を隠すように手を握り締めて回想もまた終わらせる。

「二日酔いでもちゃんと仕事してよ？ 間違っても目が腫れてるからお店に出られないとか！ それだけは絶対止めてよ？」

しつこいくらいに釘を刺しつつ、水を入れたグラスを差し出した。

「あらバレてるのねえ。汐織って本当にママのこと良く分かってる。大丈夫よ、いざとなったら風くんがいるから」

「……あのね、お母さん。その風くんだって所詮アルバイトなんだからね。昨日なんてものすごく忙しくて大変な中、ちゃんと切り盛りしてくれて。最後は酔い潰れた佐々木さんを家までおぶって連れ帰ってくれたの。そこまでさせてなにも感じない？」

バイト歴が長いことや働き振りから、風の時給はアルバイトとしてはかなりいい。

だからといって店主が店を任せきりにして遊び呆けていいはずもないし、怠慢さに痺れを切らして彼があっさりいなくなってしまう可能性だってあり得なくもないのだ。

それなのに。

「あらまあ。イワオくん、また潰れたの？ しょーがないったら。でもほら、あの人毎回結構なお金落としてくれるから、たまには送迎サービスするのもいいじゃない。風くんたらホント気が利くわねえ」

彼がサービス精神ではなく善意でしてくれた心配りがこれほどま  
であっさりと、悠長な言葉で切り返されてしまうのが忍びない。

（佐々木さん家に帰るの三日ぶりだけど、おばさんとケンカしてな  
いかな……）

外に放り出されて朝まで過ごすような、結局上総に送らせた場合  
と変わらない結末になっていなければならないのだけど、と汐織は案じ  
た。

余計な事しやがって、と逆恨みなどされてしまったら益々風が不  
運だし。

「ホストクラブに注ぎ込むだけのお金があるなら、臨時ボーナスで  
も出してあげたら？ 今風くんに辞められて困るの、お母さんでし  
よ」

「んっそうねえ、考えてみるわ」

是非とも前向きに検討ヨロシクと切に願わずにいられない。

「……あとさ。上総もね、勤務時間外に無理言って頼んだビール運  
んでくれたりとか、閉店後に厨房の洗い物手伝ってくれたりしたん  
だよ」

後半はペナルティ的な意味合いが濃かったことは伏せておいて。  
株を上げるチャンスだ、などと上総に言ってしまった手前さりげ  
なく彼の協力ぶりをアピールしてみたものの。

「あらそ」

対する嫌悪感の壁は相当厚いようで、軽くあしらわれて終わって

しまった。

「ママはもう少し寝るわ。今日もこのまま出るの？」

「うん」

「いってらっしゃい。気をつけるのよ」

「お母さんこそ寝過ぎさないようにね。行ってきます」

ふわ、とやってきてあくびに大口を開けた渚が手を振った。

【快速利用で二十分！ 通勤・通学・お買い物がより便利に！！】

海岸線と並行して走る国道沿いに大きく掲げられた看板前を通過した。

汐織は小さく息を吐き出しながらペダルを踏み込む。学校までは自転車で北上すること四十分の道程だ。

「これじゃ絶対遅刻しちゃうー！！」

一心不乱に進行方向だけを見つめて叫ぶ声が、風に攫われた。

朝日を浴びて煌めく穏やかな紺碧の海やゴミの少なさと白さが自慢の砂浜は、汐織にとっては日常的な風景だった。

だが今は、たまに訪れる人なら感激に浸るだろう光景を眺める余裕もなければ、頬を撫でる潮風すらも鬱陶しい。海岸線をのんびり辿る自転車通学も、出遅れた朝は最悪だった。

あなたの町自慢はなんですか？

訊かれたならば、近隣の県からこぞって海水浴客が訪れる海を有していることを真っ先に挙げるだろう。というか、賑わうのも夏限定で、汐入町しおいりちょうは他になにもない平凡で静かな場所だ。

高校が存在しない汐入から一番近い県立高校が、目指す目的地。国道一本で繋がった先の建物は未だ見えて来ない。自慢の足腰を駆使して漕ぎ続けたとしても遅刻濃厚、を知らせる腕時計に目をや

って汐織はため息を漏らす。

「面倒がらずにちゃんと空気入れてくるんだっ！。私の自転車がパンクさえしてなきゃ……」

今月に入って二週間にも満たない。間に合わなければ遅刻は三回を数えることになる。

これまではオンノベに没頭しての夜更かしが寝坊の原因だったが、今朝は順調に家を出たはずだった。乗り出して、貴重なアシが問題を抱えていることを知って青くなった。

こんな時決まって頼りにする上総の姿が店先に見えない。困り果てた所に斜め向かいの【緑川ミート】から幼馴染みの千夏<sup>ちか</sup>が現れたので、自宅用の自転車を拝借した。

少しタイヤの空気があまい自転車に手こずりながら、現在に至っている。

半ば諦めの気持ちに襲われ、のんびり登校に切り替えた。足はペダル<sup>ペダル</sup>の回転を緩やかにする。

右手に広がる景色に目を馳せた汐織は、満足気に瞳を細めた。この海は小さな頃から駆け回って遊んだ、いわば公園代わり。当時のまんま風景は変わることがない。

絵画を切り裂くように、一台の白い軽トラックがすうつと視界を横切っていた。ハザードを上げながら速度を落とした車体後方に【酒のマルイチ】の文字を見つけると、汐織は期待に胸を膨らませトラックへと近付いていく。

「上総！」

ハザードを上げつつゆるゆると走り続け、停車しようとはしない

トラックと並走しながら半分ほど開かれた助手席の窓越しに汐織が叫んだ。

「学校まで乗せてってくれない？ 遅刻しそうなの、今日こそマズイの！」

上総は、ハンドル片手におにぎりを頬張りながら怪訝そうに眉を寄せる。

「こつちも寝坊して配達急いでんだ、お前の送迎までしてられっか」

「ならどうしてこんな思わせぶりに、人の横通り過ぎてスピード落とすかな」

「そりゃあ」

最後の一口を押し込んで、親指についた米粒までも綺麗に平らげると横目で汐織を窺った。

「今朝はまだ顔見てなかったから？」

「そ……それはわざわざ、ご苦労さま」

予想外の答えが返って来てぐらり、自転車がふらついた。

真っ赤になった顔を隠そうにも、ハンドルに奪われた両手のせいで叶わない。

朝っぱらからキザなセリフを言う為に、配達を急ぐ途中わざわざこんなことするなんて。ヤンキー上がりみたいな金髪ピアスの外見から、誰がそんなマメさを想像するだろうか。

「せいぜい頑張れよコーコーセー」

「えー！？ 本当に乗せてくれないつもりなの？」

「トーゼン。有り余る体力を無駄にすんな。お前帰宅部なんだから、発散しねえと色々溜まるもんもあるだろ。んじやな」

甘いことを平気で言う割に、時々優しさが欠落する彼には慣れてるつもりだけど。さすがにこの状況で見捨てられたと思うと腹が立つ。

「上総のケチ！ 意地悪！！」

黒煙を上げて加速した軽トラックに罵声を浴びせながら、汐織は自転車ではばらく後を追いかけた。けれど所詮は人力。距離が縮まるどころかますます広がり始め、二度目の諦めが訪れた。

おかげで少しだけ、学校へ到着する時間短縮には役立ったのだけど。

ざわざわと生徒達の声が飛び交う廊下の端で、担任が腕組みをしながらたま洩い顔で汐織を見下ろしている。

ひたすら目を合わせないように視線を泳がせる彼女の心理は、見透かされていたようだ。

「真田。お前確か今月三度目だったよな？」

「はい」

「遅刻の理由は自転車のタイヤがパンクして、代車が思うように走ってくれなかったと」

「……はい」

「引き返して、電車で来れば余裕だった筈だな。なぜそうしない」

指摘は尤もだった。

汐織の家から通学用沿線の最寄り駅まで自転車を飛ばして10分。

そこから駅を二つ。学校まで歩いて更に5分。自転車で国道を延々  
ひた走るよりざっと20分近く時間を短縮できる。

「えと……私乗り物酔いする体質で……」

「ほお、そうか。修学旅行先の自由行動で絶叫マシン堪能したのは、  
別人だったのか」

「……あ、れ？ そう……でしたっけ。せ、先生ってばよく覚えて  
ますねそんなこと。あははは」

妙なところで記憶力のいい担任に舌打ちしながら、汐織は必死に  
別の言い訳を考えた。

「あ、そうですねお財布！ 家に忘れてきてしまつて。切符買つお金  
がなかったんですよ、そう」

うんうんと、閃いた言い訳の内容に我ながらと感心しながら頷け  
ば、呆れたような担任のため息が漏らされた。

「見え透いた言い訳考える頭があるなら、明日から遅刻せずに済む  
方法を考えとけ。自転車通学が悪いとは言わん。が、今後も遅刻が  
増えるようなら家の人との相談を仰ぐことになるぞ」

「……はあい」

汐織は肩を竦める。

出来るなら電車通学をしたくないのが彼女の本音なので、親との  
相談は避けたいところだ。

汐入町の隣に、特に目立った史跡や名所がある訳でもない「さわ  
らぎ」という規模の小さな町がある。

ここ数年でマンションやらショッピングモールやらが連立し始めたその場所に、【さわらぎ美浜<sup>みはま</sup>】 近隣の住人たちは略して【さわ浜】と呼んでいる と名付けられたそれはそれはオシャレな駅が姿を現し最寄駅となったのは数ヶ月前の話だ。更には近隣の町との合併で町から市へと昇格を果たした。

きっかけは、北側に接する県南で“未来の街づくり”と銘打って始めた大規模な住宅開発だった。

自然環境にも恵まれ最先端の医療・教育制度が充実したそこへの移住を希望する人達が後を絶たず、大都市部までを快速で二十分で結ぶ新路線の開通計画が人気に拍車を掛けた。

その沿線上に位置しなお且つ内陸から沿岸へ延びる私鉄・海浜線の終着駅でもある「さわらぎ」に、今後の開発を見込んで快速停車駅として白羽の矢が立ったのだ。

浜もないのに“美浜”って！

最寄駅の名称も汐織にとっては不服だった。

「ほんと汐織つてば意地でも自転車で登校するんだから。自業自得覚悟なのは立派だと思っけどさあ」

教室の中から廊下の様子を窺っていた友人の伴坂<sup>ともさかな</sup>南帆もまた、担任と同じような呆れ顔で汐織を迎えた。

彼女は高校の近所に住む徒歩通学組なので、電車とも遅刻とも縁がない。

「ほとんどの生徒は路線開通してバスより通学が楽になったって大喜びなのに。わざわざ四・五十分も時間かけてる汐織の方が理解で

きないもん」

「だって国道一本で来れるし」

「その一本が果てしなく遠いんでしょ！」

去年に一度だけ、南帆を家に招待したことがある。……当然ながら自宅までは自転車で行った訳だが、余りの遠さにうんざりした彼女はそれから遊びに来ることもない。

「海を眺めて登下校なんて最高の贅沢だって思わない？」

「遅刻するって必死になってたら、その贅沢にも浸る余裕ないんだから本末転倒よ。せめてバスにでもしたら？」

相変わらず南帆の突っ込みどころは的を射ていて返す言葉が見つからない。

「でも先生は南帆みたいにバスの提案なんてして来なかった。遅刻するから電車に乗れなんて、鉄道会社の回し者みたいですよ」

「あのねえー汐織。それはバスより電車の方が本数あるし、時間読むの確実だからでしょ。大体汐織はね、異常にそっちの話にムキになり過ぎなの。何でもかんでも悪く言うのもどうかと思うよ？ あたしたち三年だし、先生だって汐織を遅刻にさせたくないから気遣って言うてくれてる優しさだって気付きなよ」

「……分かってるよ、そんなの」

「だったらオカメみたいな顔するのやめること！」

オカメと訊いて納豆のパッケージに描かれたイラストが頭に浮かぶ。

私はあそこまで下膨れてない、と反論の眼差しで汐織が顔を上げると、膨らんだ両頬を南帆に思い切り指で摘ままれた。

「汐織が地元の商店街を大事に思う気持ちはよ～～～つく、分かるからさ」

“ さわらぎなんて汐入<sup>うしひ</sup>と大して変わんないじゃん ”

弱い犬ほど良く吠える、まさにそのもの。

住み慣れた地元を愛するが故の皮肉、裏を返せば“市民”と呼ばれることへの憧れもあり。小さい頃から言い続けていた強がりも、新路線開通に伴ってついに口にすることがなくなった。

開通記念イベントで散々盛り上がった隣町に対して、期待していたおこぼれの客足も全くだった商店街。唯一の自慢・海の時期にはまだ少し早かったのも敗因だ。

衣食住揃ったさわ浜駅周辺から足を延ばしてまで訪れる価値はないと突きつけられたように。

つまらない意地や嫉妬だと分かっているけど、やっぱり悔しい。

彼女が電車を利用しない理由は、小さな小さな抵抗の証でもあった。

もともと、登校時間は遅刻ギリギリだった。

担任からの勧告もあって、あれから家を出る時間を20分早めることにした。

始めてみると意外に身体の順応が早く、大して苦でもない。けれど到着時刻が余りに早くなってしまったので、結局は途中の海岸でまったり道草をしながらの登校だった。

国道の町境付近に、車五台分が停車出来るほど道路がせり出した場所がある。夏になると二・三軒の露店が並ぶちょっとした休憩所だった。ここまでくれば5分もあれば学校へ到着する。

自転車を止めて、汐織はいつものように浜辺へ降りた。

「やっぱり落ち着くな、こうして海眺めると」

海面を立ち上げゆったりと押し寄せては白い裾を広げる、今朝の海を眺めてひとりごちた。

両親の出会いが海だったと聞いている。海沿いの部屋で暮らし、波の音を胎教に育てたらしいので安らぐのは当然なのかもしれない。

「最近姿が見えないと思ったら、また妙なところで油売りやがって」

汐織は声に振り返る。

道路と砂浜を大きく切断するコンクリートの壁に腰かけて、見下ろしていたのは上総だった。

今までは、家を出る時間に店の前で配達用荷物の積み込みをしている上総と毎朝、お互いの姿を確認して挨拶を交わすのが自然と日課になっていた。

黙って一方的にリズムを崩した汐織を氣にかけていたのだと思う。

「ごめん、言ってなかったね。遅刻続きだったから、早目に家出るようにしてここで時間調整してるの。今度遅刻したら親と相談するって脅すんだもん」

「ああ。この間のアレか」

「上総があの時送ってくれたらこんなことにならなかったんだよ？」

不満気に汐織は口を尖らせた。

上総はひらりと壁を飛び降りて、スニーカーが砂に沈みこむのを氣にもせずやって来る。

「それ以前に実績作ってきたのは汐織だろ。それに一度前例作っちゃったら癖になる。結果的に良かったじゃねえか、対策自分で捻り出したんだから」

「そうだけど、寒くなるとキツイかなってちょっと考え直してる。それに……」

「挫折すんの早すぎ」

もう一つの理由も訊かずに肩を震わせて笑う上総に力チンときた。

「女の子の朝の一分一秒って貴重なんだから！ 上総は寝坊したって車飛ばせば配達間に合っちゃうから、どうせ分かんないでしょうけど」

「あー分かんねえな。電車通学にすりゃ朝も余裕で顔見られるってのに、意地になってチャリで通う汐織の考えなんてちつとも」

引つ込みの付かなくなった八つ当たりを吐き出す汐織の横に並んで、上総の方からさり気なく繋がれた手。

彼の荒い口調が怒っているのではなく拗ねたような色を含んでる

と気付いたから、絡められた指先に汐織もまた力を込めた。

二人で、目の前に広がる広大な青い世界を眺める。

「私が電車通学嫌ってるの知ってて、天秤にかけるのはズルイよ」

「知らない間にあっさり時間ずらされた上に平気な顔していられて、こっちも結構傷ついてんの」

「ぜ、全然平気じゃないよ！？ だからそれも含めて考え直してるって、言おうとしたのに上総が笑うから」

伝え切れなかった正直な気持ちを告げて隣の彼を見上げると、お互いの視線が交わった。

「汐織」

柔らかく名前を呼ばれてきゅっと胸が締め付けられる。

「目覚まし代わりに俺が毎朝、電話で起こしてやる。それなら寝坊せず毎朝顔合わせられんだろ」

見下ろしてくる眼差しが、微かに意地悪っぽく細められた。

「だ、だけど、携帯が充電切れってこともあるよ？ 私よくやるし。それに毎朝って……上総だって寝坊することあるじゃない」

「ケータイ繋がんなきゃ直接家に起こしに行く。俺が寝坊したら、責任持って車で送ってやる。これなら、確実だろ？」

確実性はともかく、好きな相手の声で起こされるなんて考えただけで舞い上がってしまう。更にはお店との連絡手段以外にほとんど携帯を使用しないような上総の申し出なのだから、嬉しさに拍車がかかるのも当然だった。

「うん。じゃあお願いしようかな」

すれ違う時間を時々こうして“調整”してくれる彼には感謝している。偶然やさり気なさを装いながら自然にふたりだけの時間を作り出せるのは、一種の隠れた才能なんじゃないかと思うほど。

「ホストだあ？」

残された時間、手を繋いだまま話を続けていた。

母親が外出続きになってしている原因を知らせると、上総も驚いたように声を上げた。

「また渚さんも妙なところに足突っ込んだな」

「アイドルや流行りの若手俳優なんかですら興味も示さなかった人がハマっちゃうくらい、カッコイイ人がいるらしいよ」

「くだらねえ。俺に勝るような奴がいるとも思えねえ」

「よつく言っよね」

さらっと自惚れてみせる上総の戯言を、乾いた笑いで流す。

耳の辺りまで緩やかに波打つ寝癖混じりの金髪、左右に五つ開いたピアス、短めの眉の下には涼しげな目元。日々の重労働で鍛えられた二の腕や胸元は十分筋肉質で逞しい。サッカーをやった割には170センチ台後半の長身で。

外見だけでいうならば、言うだけのことはあると汐織も思う。

商店街の中でも正統派好青年で通る風と、密かに人気を二分する位置づけにあることはさすがに本人も知るまい。

「汐織も行こう、とか誘われてんだろ」

「うははは。やっぱりバレてる」

「あの人なら言いそうだって　つか行くんじゃねえぞ」

確認するような声と同時に、がっちり繋がれた手に力が込められた。

「行かないよホストクラブなんて。チャラチャラした人苦手だもん」

言ってから汐織は「ん？」と引つ掛かりを感じて隣の上総を見上げる。

「説得力ねえなあ。彼氏が“こんな”なのに」

同じように汐織の言葉に矛盾を感じた上総が笑う。

傍からは十分“チャラチャラ”した外見で見られている自覚があるらしい。日頃佐々木から言われる憎まれ口効果もあるのかもしれない。

「上総の場合はちょっと違うよ。見た目と違った男らしさとか、しっかりしたところがあるし」

「ホストやってる奴だって、実は結構性格良かったりするかもしれないじゃんか」

「で、でもさ！　誰にでも媚び売りたいな接し方とか、軽い話し方とかしないでしょ」

「仕事だったら、俺だってするかもしれないよ？」

「もう！　ねえなに上総！　私がせっかくフオーしようとしてるのに、どうしていちいち否定するの？」

知らない人からみたら同じ部類に見えるのかもしれないけど。

ホストに対して偏見のある汐織としては、今まで見てきた上総の

良さを一緒になど思っていないと主張しているのに。  
まったく、意地悪だ。

「だってお前。俺にベタ惚れしてます、っていうようなこと真面目な顔して言うから、次はどんな言葉が出てくんのかと思って」  
「もう出てこないから！」

面と向かって恥ずかしいことを言い過ぎたと後悔しつつ、視線を逸らした。

「喜んでんだぜ？」

「からかってるんでしょ！」

「違うつて。なあ汐織」

間が空いて名前を呼ばれると肩が跳ねるように反応してしまう。呼んだ口調にある意図が含まれてるのを感じとってしまったから。ゆっくりと、上総に視線を合わせる。じっと見つめてくる眼差しが、汐織に要求していた。

「今日の分。お前からして」

どきんと胸がときめいた。

“キスくらいいつでも遠慮なく、好きなだけさせろよ？”

付き合う時に上総から言われた。

彼は毎日するのだと勝手にノルマ付けているようだが、そんなつもりは毛頭なかった汐織は流されるままされている。求められたら断れない。断る理由がないのだから。

「恥ずかしいから、目、瞑って」

お願いすると素直に瞼を伏せる上総の睫毛の長さは発見だった。右の瞼にホクロがあるのも気付かなかった。軽く結ばれた薄い唇も、骨張った顔立ちも。

見つめているだけで苦しくなるほど愛おしい。

「上総……すき」

小さく呟いてから彼の唇にそつと触れる。

ノルマを終えてホツとしたところを追いかけるようなキスがやって来て、汐織は予想外の展開に息が止まるかと思った。

「な……なに急に……苦しいよっ」

「外だからって油断しすぎじゃねえの。不意打ちに好きなんて言われて、じつとしてられるかよ」

不敵な笑みを浮かべて見下ろしてくる。

「じつとしてられるって、だってここ……」

国道沿いで遮るものは何もない、解放感抜群の砂地なんだけど？

こんな場所でナニをしようと企んでいると言うのか。

「俺のが好きだって、言ってるんだろ」

少しずつ強くなり始めた日差しにも負けない熱いキスに、心も身体も掻き乱される。

冷やかすように鳴らされる車のクラクションにも気付かないほど、  
二人は夢中になっていた。

看板娘と金髪男 05（後書き）

SCENE・1はこれにて終了。次回はもう一組のカップル登場です。

## 内気な彼女と鈍感な彼 01

かもめ通りに面した商店街の入り口、ガラス張りで店内を晒した【カフェ シーサイド】がある。

単純で捻りのない店名にも負けず内装もさして独創性がない。カフェというより喫茶店といった表現の方がしっくりとくる印象だ。

休日の午後。クラシカルな雰囲気醸し出す【シーサイド】に客は一人きり。

「遅いなあ、汐織」

貸し切りの店内に流れるクラシックに耳を傾けながら、窓際に設けられた四人仕様のテーブル席で緑川千夏は幼馴染みの到着を待っていた。

商店街に店を構える家で育った子供たちは、ファストフード店さながらの気軽さでこの店を利用する。

学校帰り、家より先にここへ立ち寄り宿題をする風潮を作ったのは子供たちの中でも年長組、今はそれぞれ嫁いで行った【殿木写真館】の三姉妹だ。小さな常連客にマスターである美樹が飲み物やおやつを無料で提供したのをきっかけに、一番下の代である汐織と千夏まで総勢十四名が風潮に倣ってこの恩恵に与った。

がらんとした店内に、千夏は賑わっていた当時の光景を思い重ねていた。

帰宅時間のピークには、店の扉につけられたベルがカランコロンとひっきりなしに音を立て、幼馴染みたちが次々顔を出していたものだ。

今日はあと何度ベルが鳴るのだろう　いつも閑散としている店の経営を案じながら扉へ視線を投じたその瞬間、勢いよく入って来る人の姿があつた。

「遅れてごめん！」

昔の面影そのまま、慌てぶりまで変わらない汐織だった。

「……なんか外が賑やかだね？　今の声って上総さんじゃない？」

姿は見えずとも耳が捉えた声の主を千夏が尋ねれば、「うん多分ね」と答えが返って来る。

「またリコさんに掴まってるんじゃないかな」

汐織の見せる笑顔が自信と余裕と幸福感に満ちていて、ストローで弄ればカラカラと音を立てる氷を眺めながら千夏は羨ましげにため息を漏らした。

「いいなあ汐織は。上総さんと楽しそうで」

「……そう？　結構ケンカするし、素っ気なくされることがあってあるよ」

「両想いなのが前提だから、そういうのも楽しそうに見えるんだってば」

二人はこの商店街で育った同級生で幼馴染みだ。高校こそ別になつてしまつたけれど中学までは部活動も一緒に、互いに一人っ子ということもあり何でも話し合える姉妹同然の仲だった。

汐織と上総の交際については、一部の人間しか知らない。母親の渚が余りにもいい顔をしないのが理由だ。

店内に他の客がないにも関わらず千夏が上総の名前で極端にトーンを落としたのには、そんなワケがある。

「航平くんは会社遠くて朝早いもんね、帰りもほとんど残業で遅いんでしょう？ 土日会社行ってるみたいだし、なかなか会えないよね」

「そうなんだあ。志望してる看護大学が航ちゃんの会社に近いのが唯一の救いなの、だから絶対落ちたくないの。電車くらいは一緒になりたいじゃない」

千夏の想い人・赤坂航平は大卒の社会人二年目。汐織の店から商店街通りを挟んで左斜めに店を構える鮮魚店【魚八】の長男だが、都市部のＩＴ関連会社に勤めている。

千夏の家、精肉店【緑川ミート】とは空き店舗を挟んで十数歩の距離。【なぎさ】と【マルイチ】くらい変わらない近所だ。

「メールのやり取りはしてるんでしょ？ 夜中にでもこっそり会えばいいのに。航平くんなら絶対会ってくれるよ」

「残業で疲れて帰って来てるのに、話がしたいからなんて理由で呼び出せないもん。それにもしてお父さんに見つかったら、何言われるか分からないし」

「まあ、たっちゃんに見つかったら確かに大変そうだけど……」

好きな相手が年上で社会人、互いの家の距離間までも条件は同じだけれど、気持ちを通じ合っているか否かの差は大きい。相手に期待出来ないだけに、自らアクションを起こさなければ話をすることすらままならない現実をこうして目の当たりにして、汐織はそう思う。

加えて千夏には大きな障害がある。

< 魚八のシヨウスケ > と < 緑川のタツ >。二人の父親は幼少の頃から事あるごとに張り合ってきたというライバル心が未だに健在で、商店街の会合を開いてもしょっちゅう意見が対立する。犬猿の仲というほどではないが、磁石の同極くらいには反発し合う関係だ。

おまけに千夏は一人娘。夜中に逢引き、しかも相手がシヨウスケの息子だということがバレたらどうなるのか、火を見るよりも明らかだった。

「やっぱりあの時につまらない意地なんて張らないで、告白しておけば良かったなあ」

また言ってる。

汐織は呆れ顔で頬杖をついた。

三年前、汐織と千夏が中学を卒業する年だった。

航平が二十歳になる前に気持ちを伝えておこうと決意した朝だったらしい。別れたはずの元カノが年明けに控えた成人式の為に帰省中、彼を訪ねて来た場面に千夏が遭遇してしまった。

元、がついても航平と付き合っていた過去がある彼女が大人の風貌で現れたら、嫉妬するのは当然だった。中学生の自分と比較して落ち込み、千夏は告白の機会を失ってしまったのだ。

「告白って今じゃダメなの？ 航平くんのことそんなに好きなのに、言わずにいる方がツラくない？ 千夏なりにタイミングとか心構えとかあるのかもしれないけど、後悔してるならさっさと伝えたらいいのに。それなら引け目なく呼び出す理由になるでしょ？」

あれから航平の話が出てくると、決まって千夏は三年前の後悔を

口にする。

だからといって前向きに行動を起こすわけでもなく、ただ自分を羨ましいと疎むばかりなのが汐織は少しだけ鬱陶しくなっていた。

「……汐織には分かんないよ……」

「分かるよ。一回失敗すると怖くなって、次に進めなくなる千夏の性格分かるから言ってるんだよ。本気なんでしょ？ 航平くん今彼女いないんでしょ？ また誰かのものになってもいいの？」

「良くないよ！」

「だったらさ」

「私は汐織みたいに強くないんだから！ もし……航ちゃんに告めんって言われたら、それこそ辛いもん！ 航ちゃん فقطと好きだったのに、好きでいらなくなるなんてイヤだよ……」

「だったら何度だってぶつかっていけばいいじゃない」

「嫌われたらもっとイヤなの、出来ないって言ってるんじゃない！ 汐織のバカ！」

苛立ちから悪口が漏れたのは千夏の方が先だった。

こうなるとケンカに発展するだけなのは長年の経験から会得していることなので、汐織は席を立った。

「じゃあもう知らない！ 航平くんに彼女が出来て結婚することになったって、同情なんてしないからね！」

千夏の分からず屋！

最後は、言いたいのをぐつと堪えた。

大切な幼馴染みだから、後悔ばかりで終わってしまう恋にして欲しくないのに。勇気を出して一歩だけ踏み出して欲しいのに。

不満を抱えた汐織が店を出ると、隣の花屋【フラワーショップはなびし】から飛び出してきた金髪男と衝突しそうになる。

「この次ご馳走になっからさ！……お、汐織ナイスタイミング」  
「この次この次っていつになったら……あら汐織ちゃん」

エプロンに長靴姿の店主が、男のシャツを掴んだまま引きずられるようにして姿を見せて、汐織を目にするとにこりと微笑んだ。

「これから上総くんにお昼振舞おうと思ってるの」  
「はあ……」

優雅に浮かんだ笑顔には似つかわしくない腕の力で、上総の背中を強引に引き寄せる。〈はなびしのリコさん〉は四十歳目前の独身で、上総がお気に入りだった。ついでに言っと、上総といい雰囲気  
の汐織に一方的なライバル心を抱いている……らしい。

「だからもう飯は食ったんだって！それにほら！汐織連れてこ  
いて渚さんに言われてんの忘れてたし」  
「ウン」

「ホントだって。だからまた、んじゃ！」

強引に莉子を振り切った上総が汐織の腕を取って通りを奥へ進んでいく。

「大人しくご馳走になってくればいいじゃない。断ってばかりだ  
からリコさんも熱狂しちゃうんだと思うよ」

「馬鹿言え。俺が喰われる。なあ、お前んとこでなんか食わして。  
腹の虫抑えんの必死でめちゃくちや腹減ってきた」

「勝手に食べていけばいいじゃない」

「お前も飯まだだろ？ 一緒に食おうぜ。汐織のお好み焼きが食いたいの、あの絶妙な焼き加減は俺には無理」

掴んだ腕をそのままに、にっと笑う。

年の功とでも言うべきか、上総は誘い方ひとつとっても乗せるのが上手い。

「調子いいこと言っても奢らないしサービスもしないんだからね」  
「ああいらねえよ。その代わり、剥れっツラのワケ聞かせろよな」

彼女の微妙な変化を察して柄でもない気遣いを見せるところが、敵わないと思わせる。

「ほんと、優しすぎるんだから」

彼には聞こえないように。汐織はぼそりと呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1262ba/>

---

clear

2012年1月14日16時59分発行